

MRI ECONOMIC REVIEW

株式会社三菱総合研究所
政策・経済研究センター

第3回 ニュートンも経験した

—日本経済新聞 2015年9月7日付掲載 ゼミナール「バブルの歴史」より—

バブルの歴史は古い。17～18世紀の欧州三大バブルを振り返ろう。

まず、オランダの「チューリップ・バブル」。16世紀半ばに欧州に持ち込まれたチューリップは希少な球根を中心に人気を集めた。価格が上昇し始めると、花に無関心な投機家が参入。市場を安定させる商人や花の愛好家は取引をやめた。球根が将来生む利益の価値からかけ離れ、根拠なき値上がり期待から「非合理的バブル」が発生した。だが「買い手がいなくなる」との噂が流れると暴落。バブルは崩壊した。

ルイ14世の死後、フランスでは「ミシシッピ計画」がバブルを生んだ。膨れ上がった国家の債務を軽減し経済発展を促す仕組みとして、ジョン・ローが考案したのが北米ミシシッピ川周辺での開発・貿易計画である。

ローの開発会社は王立銀行を傘下に収め、紙幣を大量に増発。政府債務を紙幣に替え、さらに開発会社の株と交換した。新株発行を積極化する中、株が投機対象に。紙幣の大量発行によるインフレで「百万長者」の言葉も生まれた。暴騰の2年後、株価は暴落した。

ミシシッピ会社の英国版が、やはり政府債務を肩代わりした「南海会社」だ。英国債を引き受ける代わり同額面の株式発行を認める条件で、南海会社の利益が増えるとの期待が広がった。幅広い層を巻き込む投機ブームが起こったが、数カ月で株価は暴落した。

「南海泡沫（ほうまつ）事件」で2万ポンドの損失を被ったニュートンは「天体の動きは計算できるが、群衆の狂気は計算できない」と語ったそうだ。現在まで続くバブルの本質は既に現れていた。

バブルの始まり
チューリップ・バブル(1633～37年、オランダ)
チューリップの球根が投機対象に。 信用取引、先物取引の導入
ミシシッピ・バブル(1719～21年、フランス)
仏の北米植民地開発・貿易計画。開発会社の ミシシッピ会社の株式が投機対象に
南海泡沫(ほうまつ)事件(1720年、英国)
英国南海会社の株式が投機対象に。 バブルの語源

※本コラムは、日本経済新聞の「ゼミナール」に2015年9月3日から17日まで10回にわたり掲載されたものです。
内容の全部または一部を無断で複写・転載することは禁止されています。